

市川市北下遺跡瓦窯跡 発掘調査概報



平成 20 年 4 月
財団法人 千葉県教育振興財団

序 文

古代の律令体制下で、千葉県には上総・下総・安房の3国が置かれ、それぞれ国分寺が建立されました。下総国に位置する市川市でも、下総国分僧寺・尼寺の両寺が確認され、近隣に国分寺の屋根瓦を供給する瓦窯跡の存在が想定されていました。

今回、従来国分寺東瓦窯跡と称された位置にあたる北下遺跡が調査され、登り窯1基と平窯1基が発見されました。そこで、千葉県教育委員会では、瓦窯跡と国分寺の関連を解明するため、国庫補助を受けて平成17年度及び平成19年度に財団法人千葉県教育振興財団に委託して整理作業を実施しました。

窯内からは、下総国分寺で使用されていた宝相華文を使った軒先瓦が出土し、本遺跡が下総国分寺の瓦を製作した窯跡であることが明らかとなりました。これまで、下総国分寺は、建物配置や構造及び瓦の文様から地方色の強い国分寺として考えられてきましたが、上総国分寺の瓦窯跡と同様、中央からの新しい技術である平窯が本遺跡で確認され、中央との関係が深かった一面がうかがわれます。下総国分寺を考えるうえで大変重要な成果と考えられます。

このたび、その調査成果がまとまり、概報という形で刊行する運びとなりました。本書が学術資料として、また、文化財保護・活用のための基本資料とされることを期待します。

最後になりましたが、文化庁をはじめ、市川市教育委員会など、関係者の皆様には多大な御協力をいただきました。心から感謝いたします。

平成19年10月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 山口 喜弘

本文目次

I	はじめに	1
1	遺跡の位置と環境	1
2	調査の概要	2
II	遺構と遺物	3
1	瓦窯跡	3
	SO-002	3
	SO-003	6
2	土坑	12
	SX-001	12
	SK-002	17
III	まとめ	17
報告書抄録		卷末

挿図目次

第1図	下総国分寺東瓦窯跡	1	第11図	SO-003出土瓦(4)・埴	11
第2図	遺跡の位置	1	第12図	SO-003出土土器	12
第3図	遺構配置図	2	第13図	SX-001	12
第4図	SO-002	4	第14図	SX-001出土瓦(1)	13
第5図	SO-002出土瓦(1)	5	第15図	SX-001出土瓦(2)	14
第6図	SO-002出土瓦(2)	6	第16図	SX-001出土瓦(3)	15
第7図	SO-003	7	第17図	SX-001出土瓦(4)	16
第8図	SO-003出土瓦(1)	8	第18図	SX-001出土土器	16
第9図	SO-003出土瓦(2)	9	第19図	SK-002	16
第10図	SO-003出土瓦(3)	10			

表目次

瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦)観察表	18
-------------------------	----

凡 例

- 本書は、千葉県市川市国分五丁目946-1ほかに所在する北下遺跡(遺跡コード203-007)で調査された瓦窯跡の発掘調査概報である。
- 本事業は、平成16年度に東京外かく環状道路(市川区間)建設事業に先立って財団法人千葉県教育振興財団が実施した発掘調査で検出された瓦窯跡の整理作業で、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて財団法人千葉県教育振興財団に委託して実施した。
- 本書の執筆は、主席研究員栗田則久が行った。
- 整理の実施にあたっては、市川市教育委員会、市川市立考古博物館、山路直充氏、倉田義広氏から多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

I はじめに

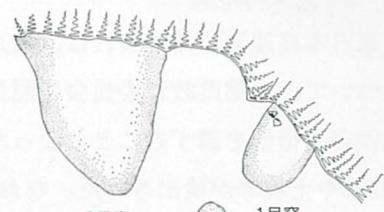
1 遺跡の位置と環境

本遺跡は、江戸川の支流である真間川によって開析された通称「国分台」と呼ばれる標高20~25mの台地上に所在する。瓦窯跡は、国分川の沖積地に向かって突出した台地の東側斜面部に立地し、下総国分寺の東約200mの位置にあたる。

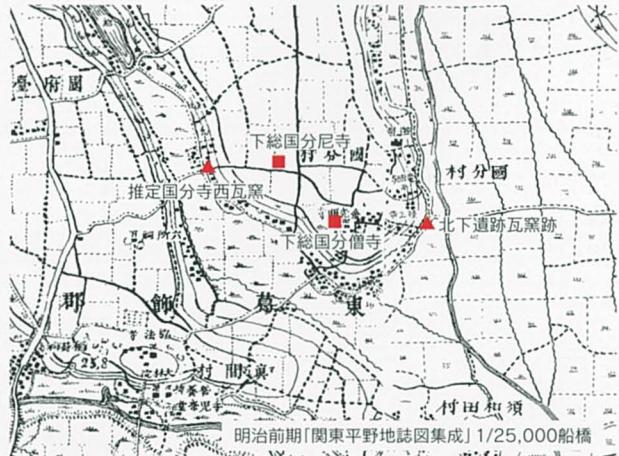
以前、本遺跡と同一の窯跡群に含まれると思われる2基の窯跡が調査されており、正式な報告はないが、市川市史に記載がある¹⁾。それによると、戦時中防空壕を掘り、のち崩れて崖状になっていた部分を大塚初重氏の指導の下に、僧寺跡を調査中の明治大学学生の編成する調査団で調査が行われている。窯跡はいずれも窯尻のみの残存である。1号窯は南南東に開口し、2号窯は西南西に開口する。

1号窯は、長さ30cm、幅30cmで、その規模から登り窯の煙道部と思

われる。2号窯は長さ80cm、幅90cmとされ、床には瓦が乱雑に遺存していたと記されている。やはり登り窯であろう。なお、1号窯の北側の段状部分に瓦が集積されていた。確認された瓦は創建時の瓦とされている。また、かつて蓮華文軒丸瓦が出土したとの記載があり、補修瓦を焼いた可能性も考えられる。国分台の西側斜面にも国分寺西瓦窯跡として存在が示されているが、詳細は不明である。本瓦窯跡が瓦を供給していた国分寺跡は至近で、本瓦窯跡の西200mに僧寺、北西400mに尼寺が位置している。



第1図 下総国分寺東瓦窯跡



第2図 遺跡の位置



(約1/10,000)

周辺航空写真(京葉測量、昭和44年)



(拡大)

2 調査の概要

東日本高速道路株式会社は、東京外かく環状道路(市川区間)建設に伴って、埋蔵文化財の有無と取扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、当該地は北下遺跡として周知の遺跡となっていたため、記録保存の措置を講ずることとなった。調査は、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。調査の結果、瓦窯2基や土坑等が検出された。なお、瓦窯2基等については、下総国分寺との関連から重要な遺構と考えられることから、今回概要報告のための整理作業を行うこととなった。

発掘調査から整理・報告書刊行にいたる調査組織及び担当者は以下のとおりである。

北下遺跡(3)

平成16年度(発掘)

期 間 平成16年4月7日～平成16年9月28日

平成16年11月2日～平成16年12月22日

組 織 調査部長 矢戸三男 西部調査事務所長 田坂 浩

担当職員 上席研究員 山田貴久

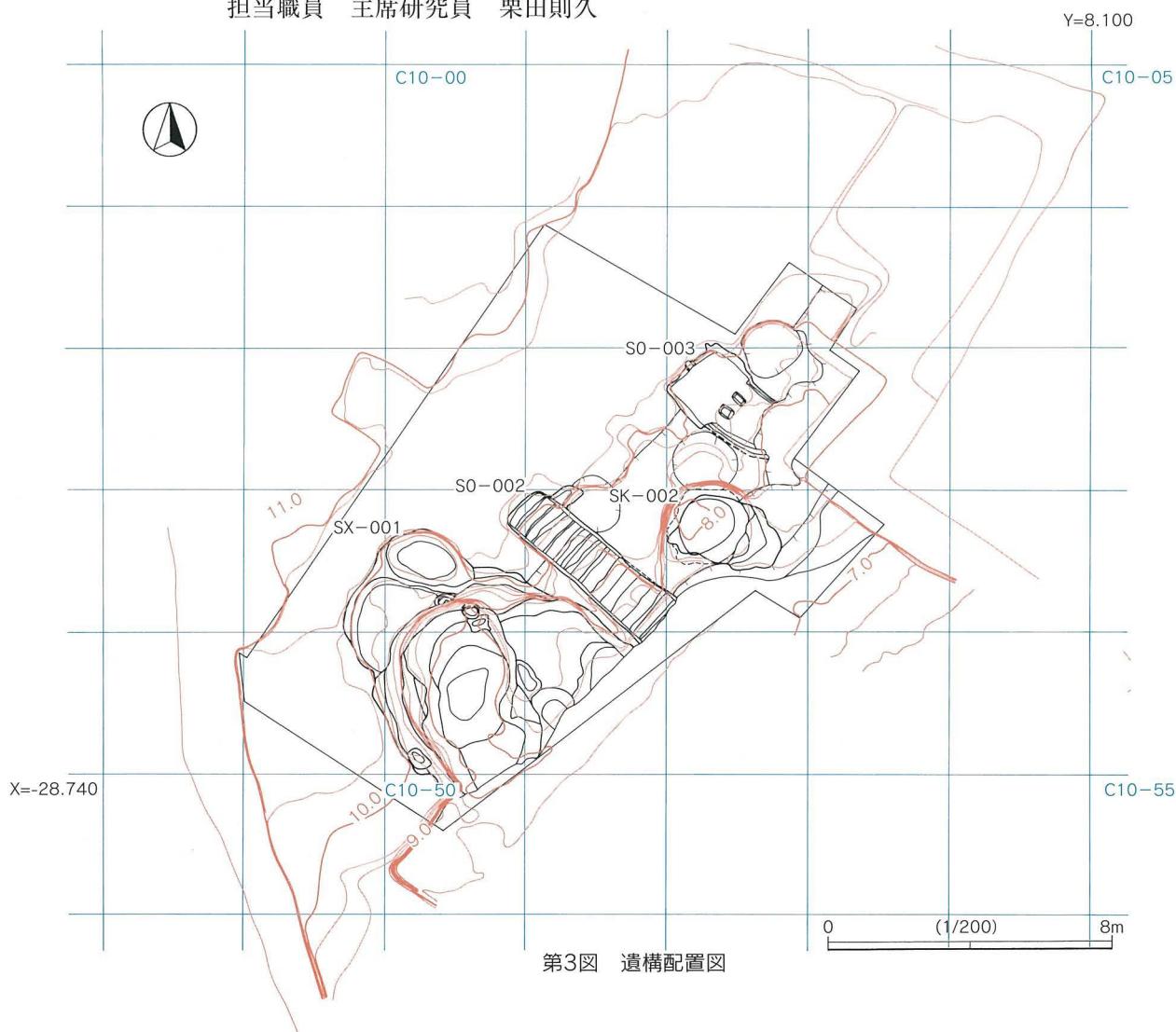
平成17・19年度(整理)

期 間 平成18年3月1日～平成18年3月31日

平成19年6月1日～平成19年6月29日

組 織 調査研究部長 矢戸三男 整理課長 加藤修司(17年度)・高田 博(19年度)

担当職員 主席研究員 栗田則久



II 遺構と遺物

現在も調査が継続している本遺跡では、瓦窯跡以外にも竪穴住居や土坑など多くの遺構が調査され、遺物も瓦や土器など多量に出土している。今回は、その中で北下遺跡(3)として調査された遺構の内、窯跡2基、土坑2基を対象に報告する。また、これらの遺構からの出土遺物も多いが、概報という性格から、主な遺物を対象に取り扱った。

1 瓦窯跡

今回の調査で検出された窯体は2基である。西側をSO-002、東側をSO-003と呼称した。いずれも焚口を南東方向に向け、主軸を斜面に直交させるように築かれているが、焚口部は、後世の攪乱や斜面の崩落等により消失していた。2基の窯体間は、壁間で4.2mを測る。

SO-002(第4図)

焼成室のみの遺存で、燃焼室及び焚口部は削平されていた。窯体は、遺存する燃焼室の構造から、有段登り窯の形状を呈すると思われる。現存する焼成室は、窯尻から5.2mを測り、内壁幅は、奥壁付近で1.3m、焚口側で1.6mを測り、窯尻から焚口にかけて徐々に幅を広げている。底面は、段差の低い有段の掘りかたを呈しているが、段差の肩部に平瓦を敷いて補強している。側壁は、現存する部分ではほぼ直立あるいはやや内傾している。側壁内側は全面にわたって良く焼けており、レンガ状に硬化している部分が多い。

煙道部は、東側側壁の奥壁近くに設けられる。側壁を0.7mほど掘り込んで、壁外に緩やかにのび、底面はレンガ状に良く焼けている。煤は全体に付着しているが、特に窯尻から煙道部にかけて顕著である。底面上には20~30cmの厚さでスラグ状に良く焼けた土が堆積しており、その上にはハードロームブロック主体の層がみられる。半地下式の天井部の崩落土であろう。



SO-002窯跡全景

焚口側遺物出土状況

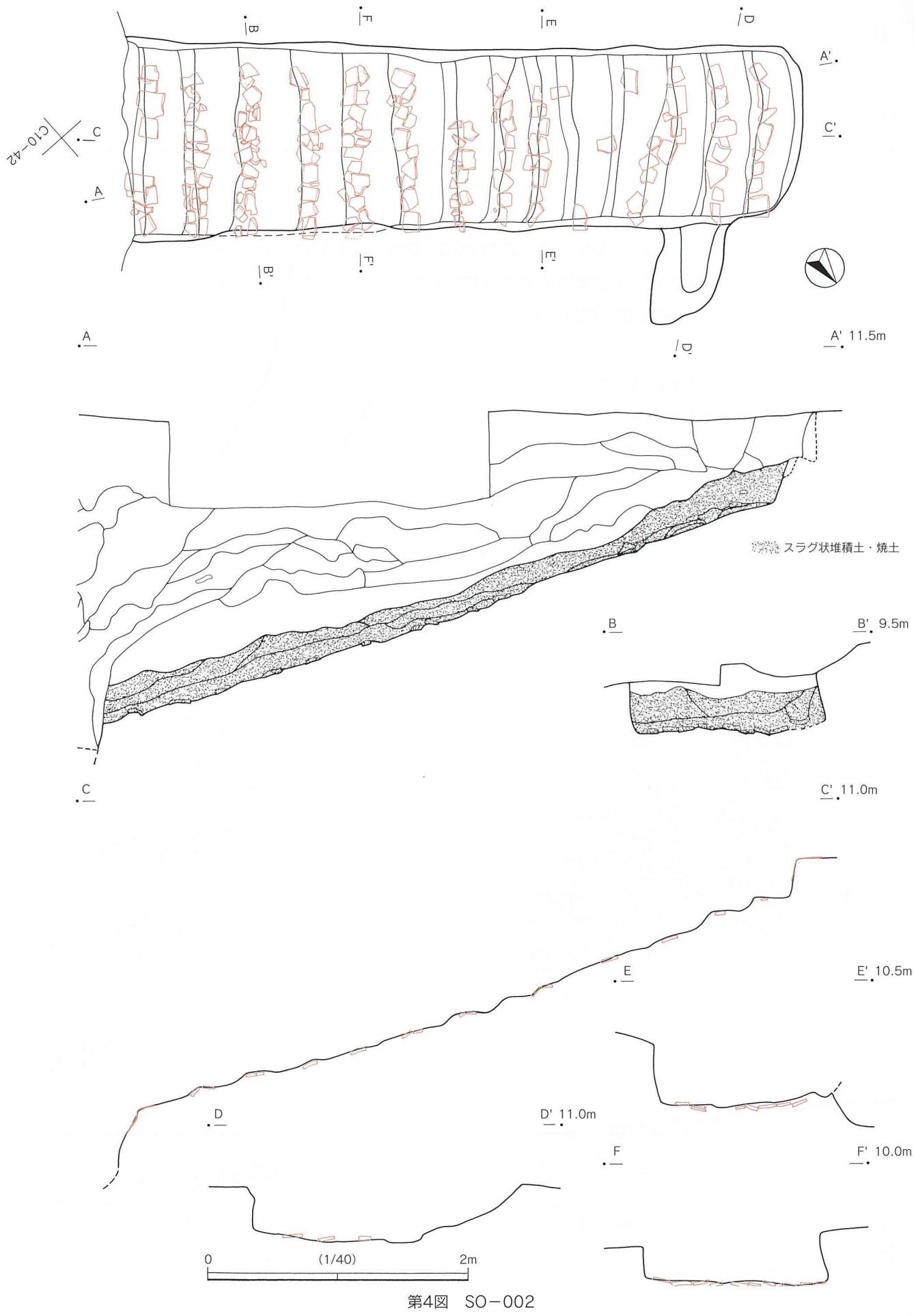


窯尻遺物出土状況



煙道部

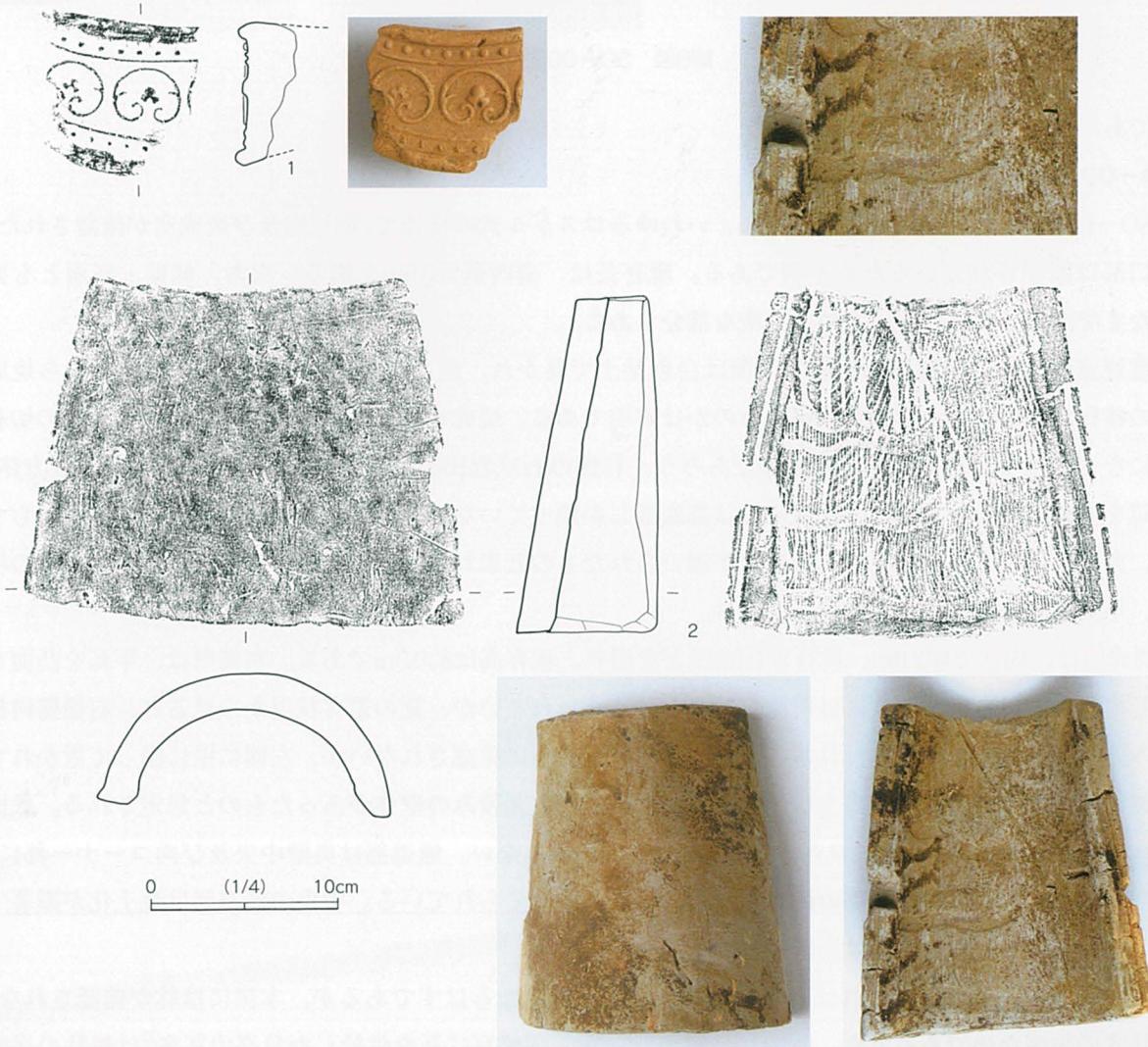




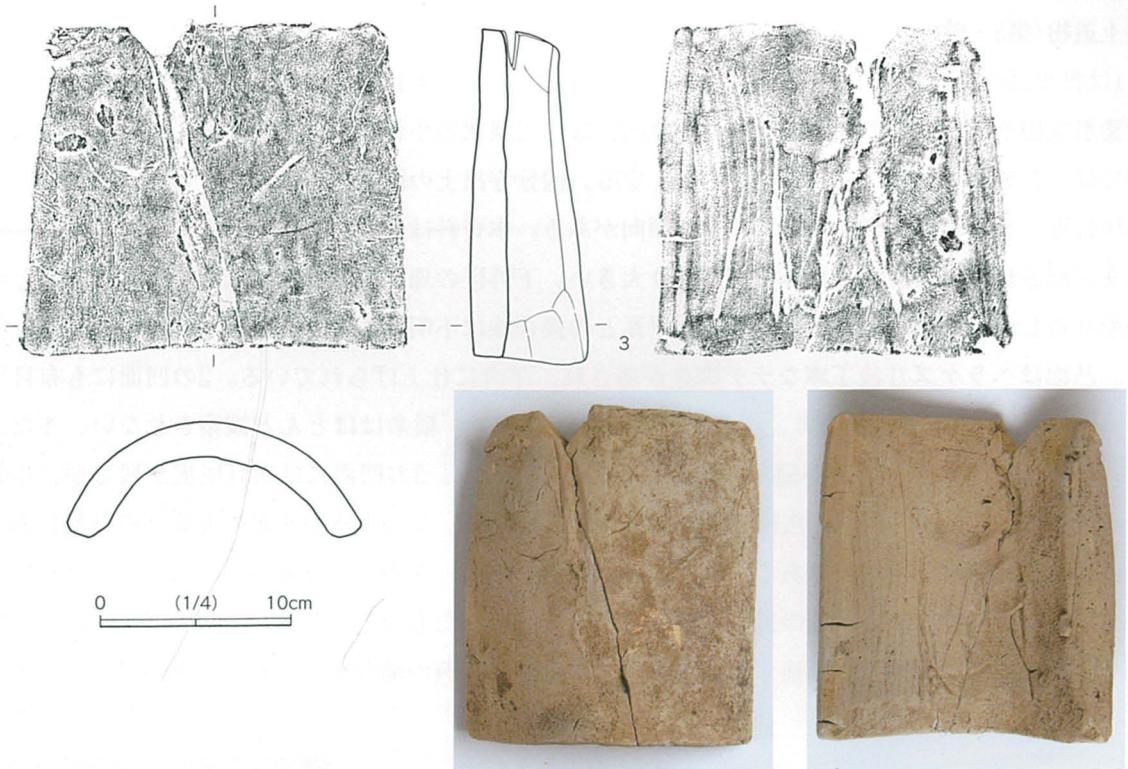
第4図 SO-002

出土遺物(第5・6図)

1は軒平瓦の瓦当部片である。小片であるが、全体に作りは丁寧である。内区には、華文の頂部が丸い対葉形宝相華文が突線で表出される。華文内には、三葉状の小華文が中心飾りとして位置するが、遺存範囲では、右側が大きく、左側はやや小さくなる。国分寺出土の同型式の瓦からすると、華文は7個配され、脇区に近くなるに従い華文が小さくなる傾向がある。本資料は中心部分に近い部位と思われる。外区には珠文が配され、上外区の珠文の方が一回り大きい。下外区の珠文右側には范ズレがみられることから、范の彫り返しがなされたものと思われる。平瓦との接合法は不明である。2・3は丸瓦の小形品で、完形である。凸面はヘラケズリ後丁寧なナデ調整が施され、平滑に仕上げられている。2の凹面にも布目圧痕がみられるが、3の布目とは異なり、撫り糸状の縦糸が明瞭で、横糸はほとんど観察されない。また、端部と平行に細かい紐状の布目痕が縦糸を切るように確認される。3の凹面には布目圧痕が残るが、半分はナデにより消されている。狭端・広端部のケズリは幅広である。このような小形の丸瓦の例は他にあまり認められない。丸瓦は屋根の大棟あるいは降り棟に使われるが、このような短いものは考えられない。可能性としては、降り棟に載せる瓦の長さの調整のために焼かれたものとも考えられる。熨斗瓦のように屋根を葺く際に現地で瓦を割って調達するのが通有であるが、本例の場合にはあらかじめ焼いておく必要があった



第5図 SO-002出土瓦(1)



第6図 SO-002出土瓦(2)

のであろう。

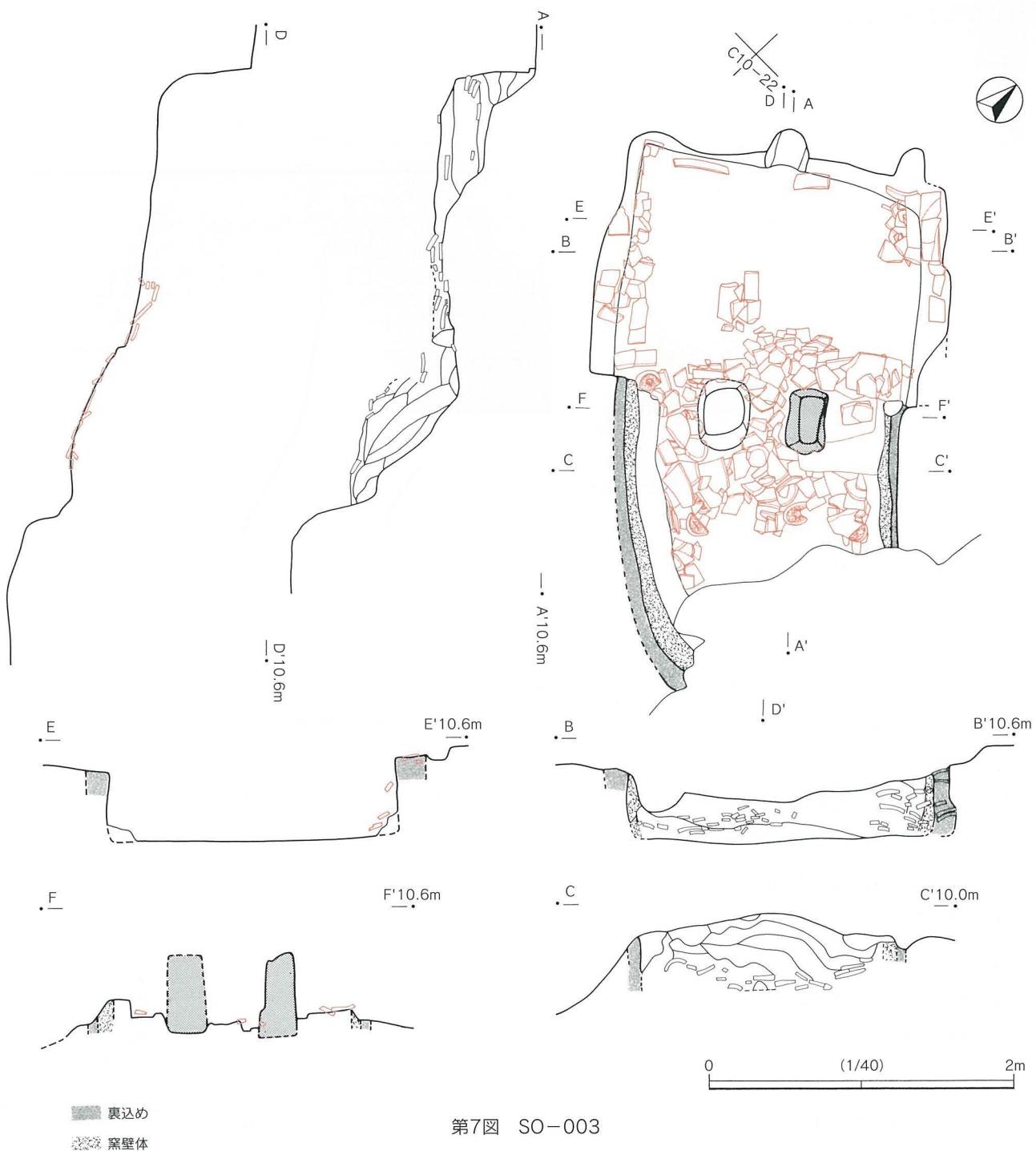
SO-003(第7図)

SO-002の北東側4mほどに位置する。いわゆるロストル式の構造で、燃焼室及び焼成室が確認されたが、焚口部は削平されているため不明である。現存長は、南西壁で3.6mを測る。なお、側壁・底面とも掘りかたまで調査されていないため、不明な部分もある。

燃焼室は、内法で幅1.6mを測る。壁は白色粘土で築かれ、底面は良く焼けている。燃焼室から焼成室への移行部分が直立するのか傾斜面なのかは不明である。焼成室に接するような位置に軟質砂岩の切石が対になって立てられている。分焰柱であろう。右側の石は幅15cm、奥行31cm、高さ53cmほどの直方体で、長辺を主軸に沿わせている。左側の石は基底部しか残っていないため明確ではないが、その痕跡からすると、方形ではなく、丸みを持った砂岩が用いられたものと思われる。分焰柱外側の燃焼室と焼成室の境には、平瓦や熨斗瓦を並べて補強している。

焼成室は、内法で幅2.0m、奥行き1.4mほどを測り、現存高は約0.5mである。右側壁は、平瓦を凸面を上にして積んでいる。左側壁には明瞭な瓦積みは認められないが、瓦の遺存状況から見ると、右側壁同様の積み方が施されたものと思われる。また、奥壁に瓦積みは確認されないが、左側に壁に沿って置かれている熨斗瓦や土層断面図の瓦出土状況などから、奥壁にも瓦積みの壁体があったものと想定される。底面は全体に焼土化しており、牀(ロストル)の痕跡は認められない。煙道部は奥壁中央及び両コーナー部に計3か所設けられ、右コーナー部の煙道部前面には平瓦が立てられている。中央の煙道部は焼土化が顕著であるが、左コーナー部の煙道は崩落が激しく明確ではない。

この平窯は、形態からすれば有牀(ロストル)式構造となるはずであるが、本窯には牀が確認されない。無牀式の平窯なのであろうか。県内には例がないが、平城京に瓦を供給した日高山瓦窯²⁾は無牀の平窯で



第7図 SO-003

ある。ただ、この窯には分焰柱がなく、平面形も「柄杓形」と異なる。また、石見国分寺の瓦を生産した石見国分寺瓦窯³⁾も無牀式の平窯とされている。平面形は本例と近いが、やはり分焰柱が設けられていない。この2例で判断することは性急と思われるが、無牀式とされる平窯には分焰柱が認められない。分焰柱を有する本窯は、焼成時にロストルを築いた状態で瓦を焼いていたものと思われる。また、第7図にあるように焼成室中央やや左側に丸瓦や平瓦・熨斗瓦などが主軸方向に平行に置かれた状態で検出された。断定できないが、牀に積まれた瓦の遺存とも考えられる。いずれにしても、分焰柱を設けながらロストル構造



SO-003窯跡全景



分焰柱付近遺物出土状況

としないことはあまり意味がないことと思われ、ここではロストル構造の平窯と捉えたい。

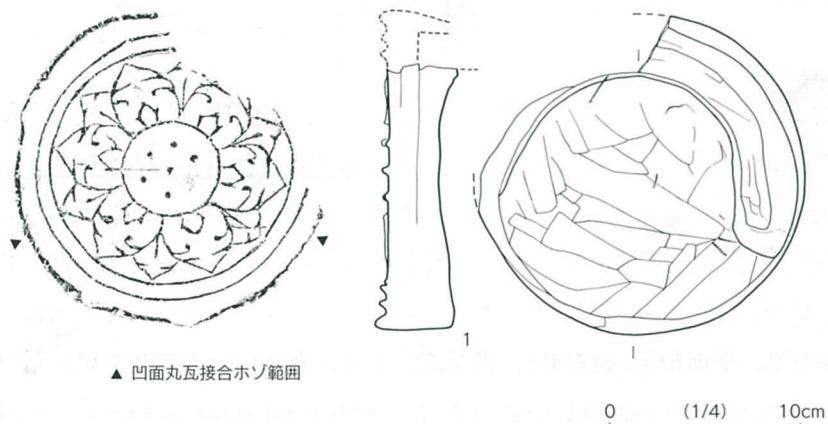
出土遺物(第8~12図)

瓦搏

1~3は軒丸瓦である。いずれも丸瓦部を欠いており、瓦当部のみの遺存である。瓦当面は六葉対葉形宝相華文を内区文様とし、華文間に間弁状の小さな対葉形宝相華文を配している。中央の蓮子は1+6となる。外区内縁には圈線が巡り、外縁は内側にやや傾斜する。1と2は同範で、1には、2にみられる範傷の進行が顕著である。裏面は、2・3が瓦当面とほぼ平行なのに対して、1は中央部がやや窪んでいる。丸瓦部の接合面が観察され、3の内側には布目圧痕が残る。



煙道部(奥壁東側)



第8図 SO-003出土瓦(1)

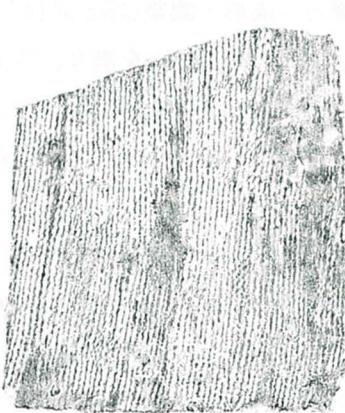
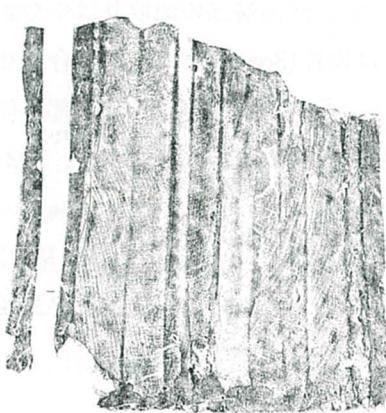
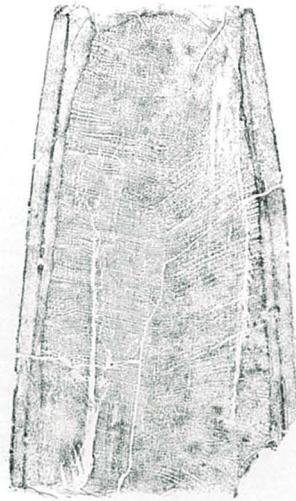
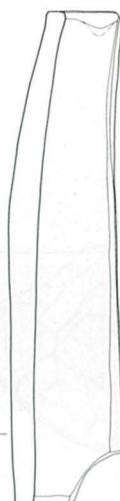
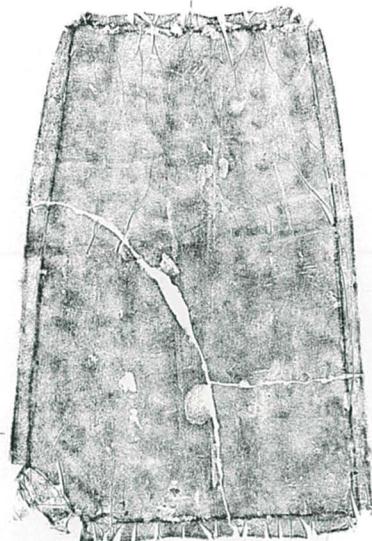




布目压痕

第9図 SO-003出土瓦(2)

4・5は丸瓦で、いずれも無段式となる。4は全長39.8cm、厚さ2.5cmを測る。凹面は、布目圧痕が全体にみられ、左側に布のダブリ、右側に布の綴じ目が残る。端部は面取りが施される。凸面は丁寧にナデ調整される。5は全長36.9cm、厚さ2.0cmを測る。成形・調整は5と同様であるが、凹面端部の面取りはやや広くなる。6は狭端部側を欠く平瓦である。広端部幅23.9cmを測り、凹面には模骨(3cm)痕と粘土板の合わせ目が明瞭に残る。側縁のケズリは広端側から狭端側に向けて行われている。凸面は縦叩きで、側縁部に部分的なナデが加えられる。7は完形に近い平瓦で、全長37.3cm、狭端幅23.4cmを測る。凹面の模骨は、幅2~3cmで、粘土板の合わせ目が部分的にみられ、中央から広端側に糸切り痕が観察される。広端・狭端部のケズリはきわめて狭い。8は完形の熨斗瓦である。全長34.0cm、広端幅7.5cmを測り、本窯跡出土の平瓦を3等分した大きさである。凹面には、模骨痕と布目がみられ、広端部側には糸切り痕が残る。側縁に平瓦端部のケズリがみられることから、この熨斗瓦は平瓦の右1/3の部分と思われる。9は埠である。



6

0 (1/6) 10cm

第10図 SO-003出土瓦(3)

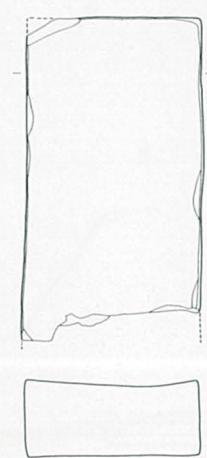
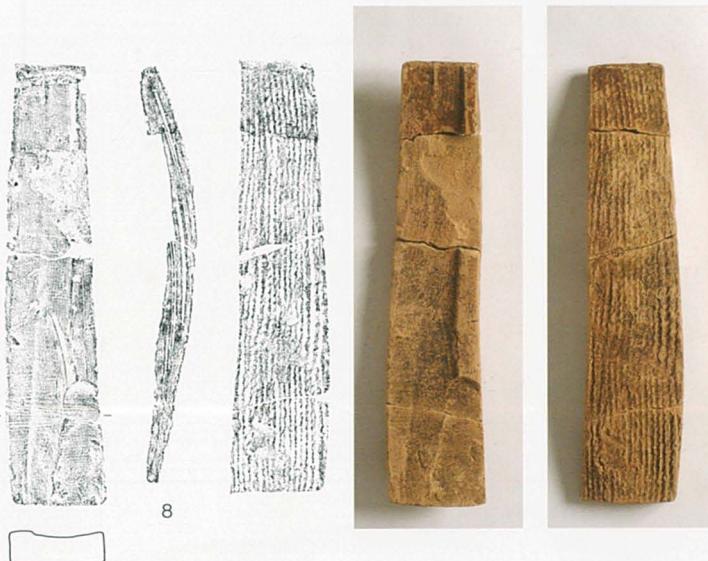


模骨痕と粘土板合わせ目



模骨痕

縄目叩き

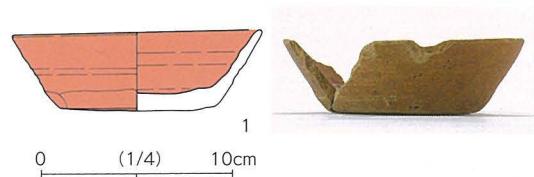


0 (1/6) 10cm

第11図 SO-003出土瓦(4)・塼

土器

1は土師器の杯である。体部の開きは少なく、直線的に立ち上がる。体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施され、内外面とも赤彩される。8世紀後半の時期と思われる。

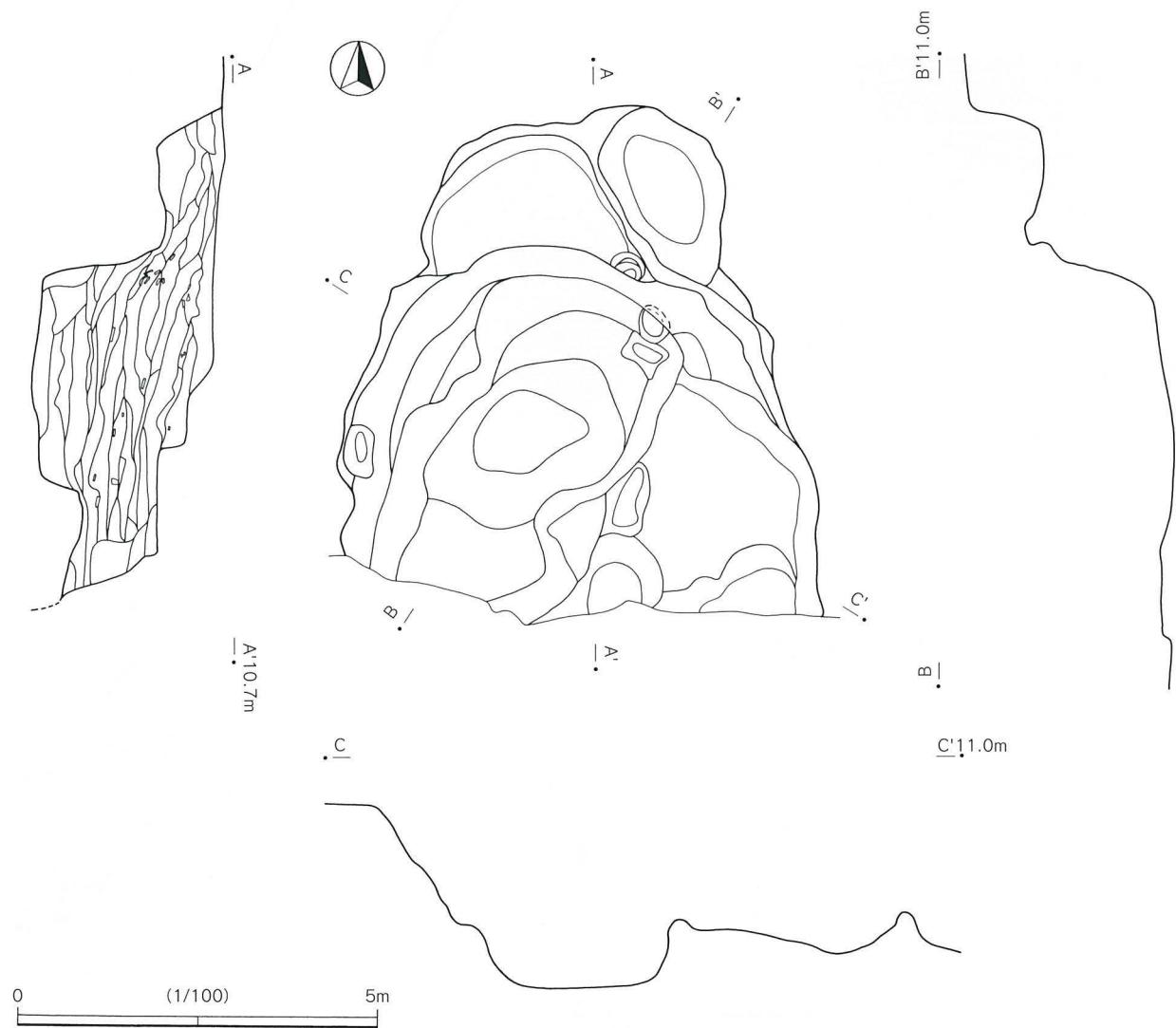


第12図 SO-003出土土器

2 土坑

SX-001(第13図)

SX-002の西側に近接する。全体に不整形で、斜面肩部の上端から底面までは約2.8mとかなり深い。規模は、長軸7.1m、短軸6.7mを測る。当初は、瓦窯に伴う採掘坑の可能性も考えられたが、覆土にあまり締まりがないことや、瓦片が覆土中層から上層にかけて多く出土していることなどから、瓦窯廃絶後に掘り込まれたものと思われる。多量の瓦や土器はある程度埋まってから一括して廃棄されたものであろう。

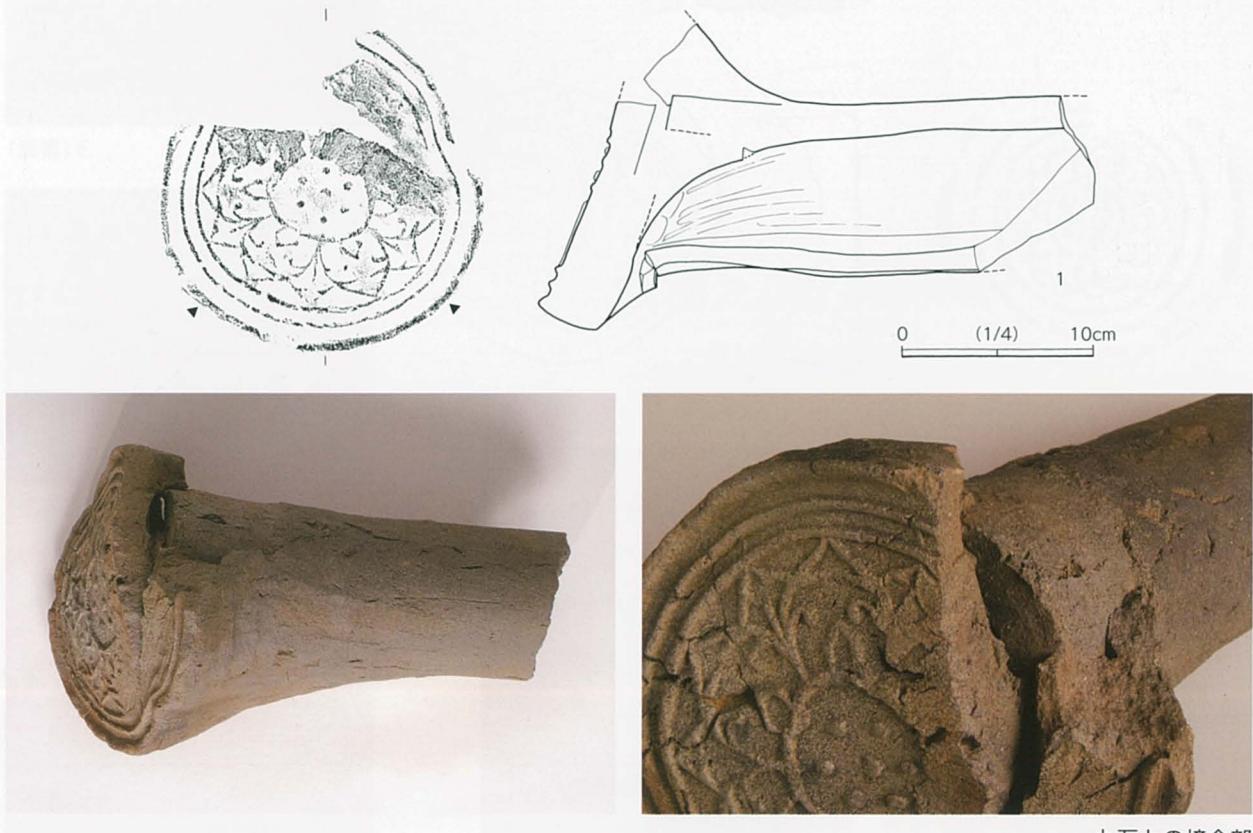


第13図 SX-001

出土遺物(第14~18図)

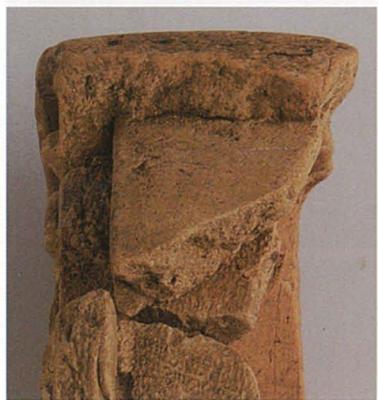
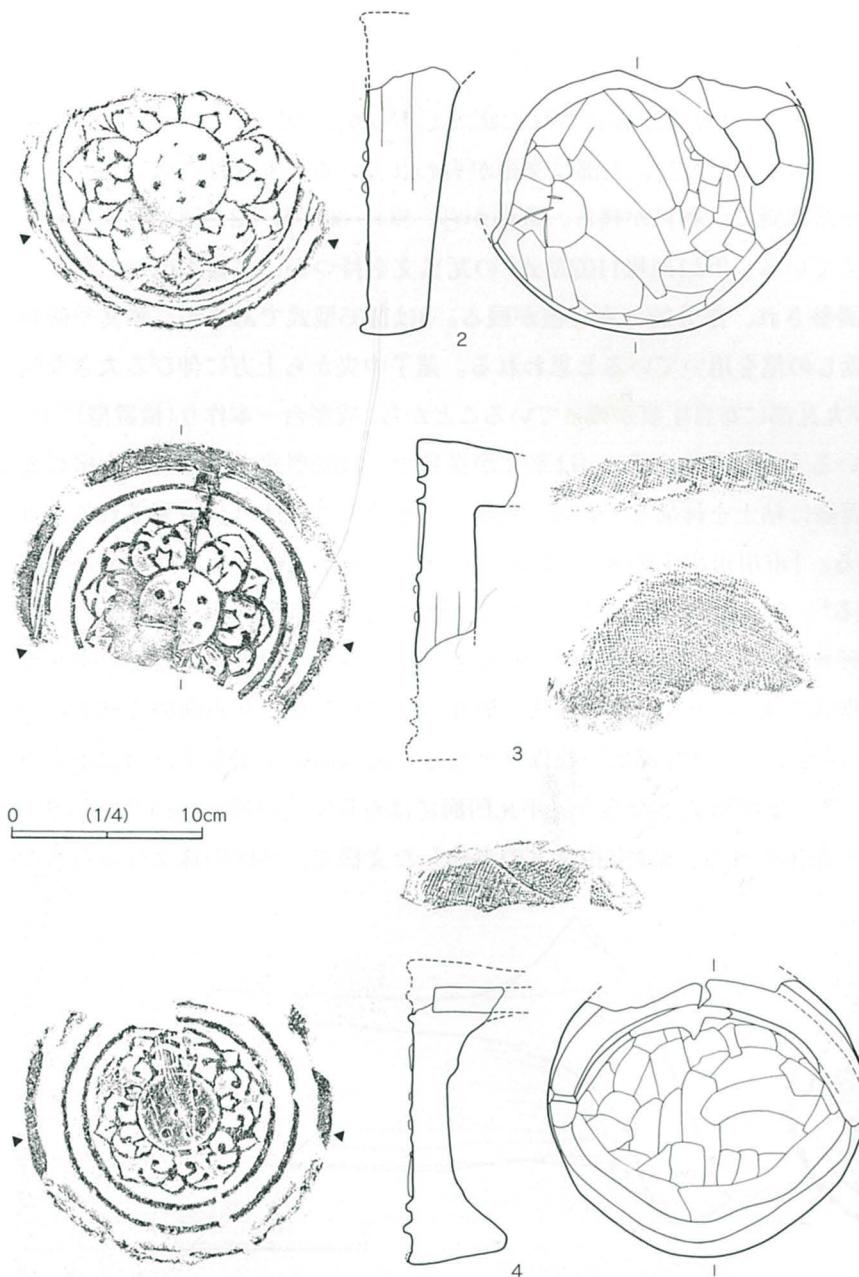
瓦

1~4は対葉形宝相華文の軒丸瓦である。1は丸瓦が接合された状況であるが、焼け歪みが激しい。瓦当面は下半が比較的文様の表出が鮮明であるのに対し、上部は文様が失われている。丸瓦部内面は瓦当部裏面から一体でナデ調整されるが、狭端部側には布目が残る。範傷から、SO-003の1・2と同範と思われるが、丸瓦の取り付け位置は180°変えている。2は1同様1102型式⁴⁾の瓦当文を持つが、文様表出は全体に不良である。丸瓦との接合面はナデ調整され、部分的に布目痕が残る。3は1105型式であるが、華文や圈線の頂部が平坦になっており、彫り返しの範を用いていると思われる。蓮子中央から上方に伸びる大きな範傷がみられる。瓦当部裏面・側面及び丸瓦部に布目圧痕が残っていることから、成型台一本作り(横置型)⁵⁾で、瓦当部と丸瓦部をともに製作しているものと思われる。4は華文が横長で、1106型式であろう。中房の蓮子はほとんど消失している。裏面周縁に粘土を付加しており、周縁部分が高くなるように成形される。丸瓦接合部の内側には布目圧痕が残る。『市川市出土の瓦』で紹介されている同型式の軒丸瓦は圈線が二重であるのに対し、本例は一重である⁶⁾。5~8は軒平瓦である。5は宝相華文の表出が端整で、シャープである。範傷も認められず、焼成も硬質である。華文は7個配されるものであろう。製作は瓦当部と平瓦部を別個に製作して接合する。2101型式である。6も同様の技法で製作されているが、瓦当面の文様表出は不良で、扁平となる。7は凸型成型台を用い、平瓦部は一枚作りとなる。瓦当面の宝相華文は頂部が尖形で、内部の小華文が十字形に近くなる。2105型式となろう。平瓦凹面には布目圧痕が残り、凸面は丁寧にナデ調整されるが、端部に繩目圧痕がみられる。8は宝相華文の退化した文様で、外区の珠文はみられない。



丸瓦との接合部

第14図 SX-001出土瓦(1)



4の接合部(布目痕)



4の丸瓦接合部(拡大)



2



3(瓦当面)



3(裏面)



4(瓦当面)



4(裏面)

第15図 SX-001出土瓦(2)



第16図 SX-001出土瓦(3)



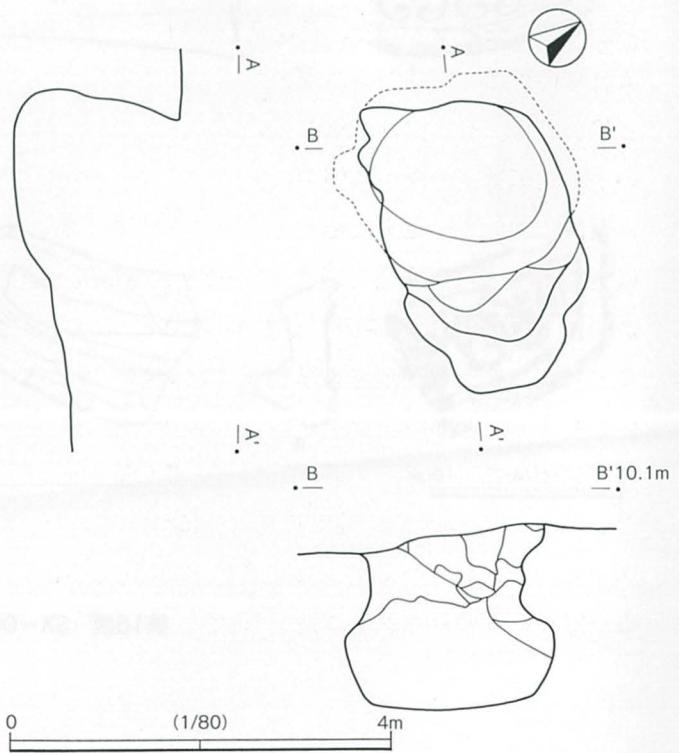
第18図 SX-001出土土器

第17図 SX-001出土瓦(4)

い。2112b型式となり、主に尼寺で葺かれる瓦である。9・10は熨斗瓦である。9は全長39.7cm、広端幅17.2cm、10は全長33.2cm、広端幅9.4cmを測る。幅からすると、9は平瓦の2/3、10は1/3の大きさである。凹面には布目、凸面には縄目叩きがみられる。いずれも凹面・凸面ともにスサ入りの土が付着しており、窯壁の瓦積みに使われたものと思われる。

土器

1は須恵器の高台付き杯で、胎土中に長石粒・雲母粒を多く含む。常陸産であろう。2~4は土師器杯である。調整は同様で、体部下端から底部全



第19図 SK-002

面に回転ヘラケズリが施される。切り離しは回転糸切りである。2~4の体部外面には墨書がみられる。2は「安」、3・4は「又」である。「又」は図示した以外にも多く認められ、集団の記号と思われる。この記号は、下総国分寺の第10調査区でも出土している⁴⁾。

SK-002(第19図)

2号窯と3号窯の間に位置する。開口部で長軸3.1m、短軸2mを測る。南東側に入り口のようなテラス面があり、北西側の主室は開口部が狭く、オーバーハングの状況を呈する。

覆土下層には、ハードロームブロックの堆積が厚くみられ、天井部の崩落土と思われる。出土遺物が少なく、構築年代は不明であるが、遺構の形態や覆土の状況から、中世以降の地下式坑となる可能性が高い。

IIIまとめ

今回の調査では、2基の窯跡が検出された。2号窯は有段の登り窯で、3号窯は平窯である。北下遺跡を含む下総国分寺東瓦窯では、昭和40年代に、明確ではないが、登り窯と思われる2基の瓦窯が調査されている。いずれも窯尻のみの確認で詳細は不明である。この2基を含めて、現在までに4基の瓦窯跡が確認され、窯構造の構成は、登り窯3基と平窯1基となる。以下で、本遺跡の瓦窯と出土瓦について簡単にまとめておく。

平窯は、調査段階では牀の高まりが認められなかったが、前述したとおり、分焰柱が設けられていることや焼成室に主軸方向に遺存している熨斗瓦などから、ロストル式平窯と想定した。ロストル式平窯は、上総国分寺に瓦を供給したいいくつかの瓦窯で確認されているが、下総国分寺供給瓦窯にも同様の平窯が存在していたことに重要な意味がある。下総国分寺では、多くの国分寺に用いられた軒先瓦の文様である蓮華文と唐草文の組み合わせではなく、宝相華文という文様を採用していることや、尼寺の簡略化した伽藍配置などから、地方色の強い国分寺として捉えられてきた。下総国分寺自体詳細が不明なため、多様な解釈が可能であろう。ただ、供給瓦窯にロストル式平窯が含まれる背景には、当時の中央の先進技術を取り入れていたことを伺わせるものであり、単に地方色という括りでは考えられず、複雑な様相があったものと思われる。登り窯は、側壁側に煙道部が設けられる特徴がある。このタイプの登り窯の類例はみられないが、須恵器窯のなかに側壁に突出して煙道が設けられるものがある。

県内の国分寺に瓦を供給する瓦窯のなかで、登り窯と平窯の両者を含む瓦窯跡は、本遺跡と上総国分寺に供給した千葉市南河原坂窯跡⁸⁾が認められる。南河原坂窯跡では、ロストル式平窯6基、半地下式登り窯8基、住居跡や工房跡43軒などが調査されている。北下遺跡では、登り窯3基と平窯1基の検出にとどまっているが、僧寺及び尼寺の屋根瓦の需要に対応するにはこの4基では少なく、本来は南河原坂と同様の規模を有する生産施設が営まれていたものと思われる。

瓦については、今回の報告以外に多量の瓦があり、それらを整理した上でなければ明確にはならない。ここでは、サンプル的に抽出した資料について触れてみる。軒丸瓦・軒平瓦とも瓦当文様は宝相華文である。図示した軒丸瓦は多くが1102型式で、後出型式である1105は1点のみである。軒平瓦は2101型式を主体とし、唯一2112型式がみられる。2112型式は尼寺に採用される瓦であるが、いずれにしても、国分寺創建瓦となる。

今回の調査で特徴的なのは、図示した熨斗瓦(道具瓦)以外に、多量の熨斗瓦が含まれていることがあげられる。整理途中のため詳細は不明であるが、SO-003の平窯に多くの熨斗瓦が含まれているようである。この大量の熨斗瓦は何に使われたのであろうか。第17図の熨斗瓦9・10の凹・凸両面にスサ入りの窯壁構築材が付着しており、平窯壁の瓦積みに使われたものであることは明確である。ただ、それだけではなく、第11図8のように付着がみられないものも存在する。また、8の大きさは平瓦の1/3、第17図9の例は2/3である。窯壁の瓦積みに用いるだけならば同じ大きさで揃えるのが通常であり、多量の熨斗瓦は、瓦積みだけではなく、建物の大棟あるいは降り棟にも用いられたものであろう。しかも、現地合わせで平瓦を割る方法とは異なり、瓦製作段階から異なる大きさの熨斗瓦を焼いていたことが想定される。このほか注目される瓦には、SO-002(登り窯)から出土した小形の丸瓦がある。類例があまりないため明確にはできないが、大棟または降り棟の長さあるいは曲面の調節のために製作された可能性が考えられる。これについても、熨斗瓦同様現場で調整することが通常であろうが、あらかじめ長さを決めて焼いたものかもしれない。もう一つの可能性として面戸瓦も考えられる。奈良市杉山瓦窯⁹⁾や京都府綴喜郡井手町石橋瓦窯¹⁰⁾から出土した面戸瓦は、焼成前に丸瓦を加工しており、本例が丸瓦の加工品であれば類似の資料となる。ただ、本例は丸瓦などとののはめ込みのための抉りがない点異なる。これについては現地合わせとなることも考えられよう。いずれにしても、この小形の丸瓦は、製作段階に道具瓦として意識されていたものと思われる。

今回の調査により、本瓦窯跡が下総国分寺に瓦を供給した官営瓦窯であることが明らかとなった。また、僧寺・尼寺の両寺の瓦を集中的に製作していた大規模な瓦窯跡となる可能性も考えられる。しかも、その中にロストル式平窯が営まれていたことから、中央の影響を多く受けていることも想定される。瓦からみると、大きさの異なる熨斗瓦や小形丸瓦が意図的に焼かれていたことなど、かなりの技術を持った瓦工人の存在が浮かび上がってくる。従来、千葉寺や結城廃寺の瓦製作に関わった工人が招集されたと指摘されている¹¹⁾が、宝相華文の採用と関連した工人の関与も考えなければならないであろう。

軒丸瓦観察表

(単位はcm)

挿図番号	遺構番号	遺物番号	瓦当部	直径	内区		外区幅	瓦当面中心厚	瓦当面下半周縁厚	胎土	焼成	色調	型式	備考
					中房径	内区径								
第5図1	SO-003	12	裏面：右→左ヶズリ 側面：下部右→左ナデ、上部瓦 当面→裏面ナデ 範当たりの痕跡	16.8	5.0	11.4	2.1	2.6	4.2	長石粒少、白色粒子	良好	橙褐色	1102a	
第9図2	SO-003	12	裏面：右→左ヶズリ 側面：下部右→左ナデ、上部瓦 当面→裏面ナデ 範当たりの痕跡	(17.4)	4.9	(13.0)	2.0	2.6	3.5	長石粒少、白色粒子	良好	橙褐色	1102a	
第9図3	SO-003	12	裏面：ナデ 側面：下部右→左ナデ、上部瓦 当面→裏面ナデ 丸瓦接合面内側に布目圧痕 範当たりの痕跡	(17.4)	(5.0)	12.8	2.2	2.7	3.4	長石粒少、白色粒子	良好	橙褐色	1102a	
第14図1	SX-001	2000	裏面：丸瓦部に向けてナデ 側面：下部右→左ナデ、上部瓦 当面→裏面ナデ 範当たりの痕跡	(17.0)	4.5	12.5	2.3	(3.0)	3.5	長石粒・白色粒子多	硬質	青灰色	1102a	焼き歪みが激しい
第15図2	SX-001	1122	裏面：ナデ、丸瓦接合面内側に 布目圧痕 側面：遺存部では右→左ナデ	(17.7)	5.2	12.8	2.0	3.6	3.5	白色粒子・褐色砂粒	良好	橙褐色	1102b	
第15図3	SX-001	1068	裏面：布目圧痕 側面：上部瓦当面→裏面ナデ、 下部布目圧痕	(17.0)	4.6	10.5	3.2	3.0	—	長石粒・白色粒子多	硬質	青灰色	1105a	
第15図4	SX-001	1068	裏面：下端部丁寧なナデ、以外 は粗いナデ 側面：下部右→左ナデ、上部瓦 当面→裏面ナデ 丸瓦接合面内側に布目圧痕 範当たりの痕跡明瞭	16.5	4.5	10.1	3.1	1.9	5.2	長石粒多、白色粒子	良好	黄褐色	1102a	

軒平瓦観察表

(単位はcm)

挿図番号	遺構番号	遺物番号	瓦当部	瓦当面					胎土	焼成	色調	型式	備考
				厚さ	内区厚	上外区厚	下外区厚	脇幅					
第5図1	SO-002	26	凹面：右→左ナデ 凸面：右→左ナデ	7.7	4.0	1.6	1.9	—	白色粒子・褐色砂粒	良好	橙褐色	2101	
第16図5	SX-001	911	凹面：瓦当面→平瓦ナデ 凸面：瓦当面→平瓦斜位ナデの ち部分的に左→右ナデ	6.9	4.0	1.2	1.7	1.0	長石粒少、白色粒子	硬質	青灰色	2101	
第16図6	SX-001	125	凹面：右→左ナデ 凸面：左→右ナデ 平瓦接合面に布目圧痕	7.3	3.4	1.9	2.0	1.4	長石粒・白色粒子多	良好	黄灰色	2101	
第16図7	SX-001	572	凹面：右→左ナデ 凸面：左→右ナデ	6.5	3.6	1.4	1.5	—	長石粒・白色粒子多	良好	黄灰色	2105	一枚作り
第16図8	SX-001	461	凹面：右→左ナデ 凸面：左→右ナデ	7.8	4.0	1.9	2.1	1.2	混入物少	良好	黄灰色	2112b	

丸瓦観察表

(単位はcm、kg)

挿図番号	遺構番号	遺物番号	各部位の特徴	厚さ	幅	長さ	現存重量	復元重量	胎土	焼成	色調	備考
第5図2	SO-002	9	凹面：布目圧痕、側縁ナデ、広端ケズリ、狭端ナデ粘土板合わせ目有 凸面：丁寧なナデ 側面：ナデ	1.9	15.7	18.8	1.0	1.0	白色粒	硬質	灰褐色	小形
第6図3	SO-002	14	凹面：布目圧痕後ナデ、布目合わせ目有、側縁ナデ、広端・狭端ケズリ 凸面：ナデ 側面：ナデ	1.8	15.9	17.3	0.8	0.9	白色粒・黒色粒多	硬質	灰褐色	小形
第10図4	SO-003	7	凹面：布目圧痕、粘土板合わせ目有、側縁・広端・狭端ケズリ 凸面：ナデ 側面：ナデ	1.9	15.5	39.7	2.2	2.3	白色粒・褐色粒	良好	黄灰色	
第10図5	SO-003	7	凹面：布目圧痕、粘土板合わせ目有、側縁・広端・狭端ナデ 凸面：ナデ 側面：ナデ	2.6	15.4	37.1	2.0	2.2	白色粒多	良好	黄灰色	

平瓦観察表

(単位はcm、kg)

挿図番号	遺構番号	遺物番号	各部位の特徴	厚さ	幅	長さ	現存重量	復元重量	胎土	焼成	色調	備考
第10図6	SO-003	22	凹面：布目圧痕、模骨枠板痕有、側縁ケズリ、広端ナデ、粘土板合わせ目有 凸面：繩目圧痕、部分的なナデ 側面：広端→狭端ナデ	3.0	23.9	(31.0)	2.8	3.2	白色粒・褐色砂粒少	良好	橙褐色	
第11図7	SO-003	22	凹面：布目圧痕、模骨枠板痕有、側縁ケズリ、狭端ナデ、粘土板合わせ目有 凸面：繩目圧痕、離れ砂(赤褐色粒) 側面：広端→狭端ナデ	2.5	23.4	37.3	3.1	3.3	砂粒少	良好	橙褐色	

熨斗瓦観察表

(単位はcm、kg)

挿図番号	遺構番号	遺物番号	各部位の特徴	厚さ	幅	長さ	現存重量	復元重量	胎土	焼成	色調	備考
第11図8	SO-003	1・5・8	凹面：布目圧痕、模骨枠板痕有、側縁ナデ 凸面：繩目圧痕、離れ砂(褐色粒) 側面：ケズリ後ナデ	2.4	7.5	34.1	0.8	0.8	砂粒少	良好	橙褐色	
第17図9	SX-001	1996	凹面：布目圧痕、模骨枠板痕有、側縁ナデ、狭端・広端側ケズリ 凸面：繩目圧痕、離れ砂(白色・褐色粒) 側面：広端→狭端ナデ	2.5	17.2	39.7	2.4	2.5	砂粒多	良好	橙褐色	窯壁材付着
第17図10	SX-001	2091	凹面：布目圧痕、模骨枠板痕有、側縁狭端→広端ケズリ 凸面：繩目圧痕、離れ砂(白色粒) 側面：広端→狭端ケズリ後ナデ	2.6	9.2	33.2	1.4	1.4	砂粒少	硬質	灰褐色	窯壁材付着

註

- 1) 滝口 宏 1974 「下総国分寺址」『市川市史 第二巻』 市川市
- 2) 綱干善教 1962 「檜原市飛驒町瓦窯跡」『奈良県文化財報告五』
- 3) 柿原博英 2006 『史跡石見国分寺跡 県史跡石見国分尼寺跡 平成14年度～17年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 4) 山路直充・領塚正浩 1988 『市川市出土の瓦』I 市立市川考古博物館
例言で瓦当文様の分類を行っている。4桁目は瓦の種類、3桁目は瓦当文様、2・1桁目は範の差異となる。なお、アルファベットは瓦当範の彫り直しなど、当初のものと区別するために付している。
- 5) 上原真人 1996 「屋根を飾った蓮華文」『日本の美術No.359 蓮華文』 至文堂
- 6) 註4に同じ
- 7) 窯跡研究会 2004 『須恵器窯構造資料集2－8世紀中頃から12世紀を中心として』
- 8) 村田六郎太他 1996 『土気南遺跡群Ⅶ 南河原坂窯跡群・鐘つき堂遺跡』 財団法人千葉市文化財調査協会
- 9) 宮崎正裕 1997 『史跡大安寺旧境内 I—杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告一』 奈良市教育委員会
- 10) 内田真雄 2003 『石橋瓦窯跡発掘調査概報—平成14年度—』 井手町教育委員会
- 11) 山路直充 1998 「下総国分僧寺跡」『千葉県の歴史 資料編3(奈良・平安時代)』 千葉県

報告書抄録

ふりがな	いちかわしきたしたいせきがようあとはくつちょうさがいほう
書名	市川市北下遺跡瓦窯跡 発掘調査概報
副書名	
卷次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第602集
編著者名	栗田則久
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043(424)4848
発行年月日	西暦2008年4月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北下遺跡	市川市国分五946-1 ほか	12203	007	35度 44分 35秒	139度 55分 06秒	20070601 ～ 20070629	200m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北下遺跡	瓦窯跡 集落跡	奈良・平安時代 中近世	登り窯1基、平窯1基 土坑2基		瓦・土師器・須恵器		登り窯の他にロストル式平窯が検出され、下総国分寺の性格を考察する上で貴重な資料となつた。	
要約	従来、下総国分寺に瓦を供給した瓦窯跡として捉えられていた本遺跡の今回の発掘調査により、登り窯1基とロストル式平窯1基が確認され、瓦窯内から出土した軒丸瓦や軒平瓦などの瓦当文様から、下総国分寺創建期の瓦を焼成していた窯であることが明らかとなった。また、ロストル式平窯の検出は、これまで地方色の強い国分寺とされてきた成立背景に、中央的な先進技術・工人などの関与を加味した再検討をする必要性を促した成果と考えられる。国分寺の軒先瓦にあまり類例のない宝相華文を採用していることと関連して重要な点である。							

千葉県教育振興財団調査報告第602集

市川市北下遺跡瓦窯跡 発掘調査概報

平成20年4月30日発行

発行 財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印刷 株式会社 エリート情報社
成田市東和田415-10

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。

